日野病院
病院長コラム

第96回

今年の主役はマイコプラズマ感染症？

日野病院 病院長　孝田　雅彦

日野病院の孝田雅彦病院長が、さまざまな病気や健康について、その予防法や健康に過ごすための豆知識などお役立ち情報をお届けします。

オリンピック年に流行りだす？マイコプラズマ

朝晩寒さが厳しくなり、布団から出られない季節がやってきました。気がつくと鼻水が出て、咳がこんこんという人もいるかもしれません。インフルエンザかなあ、コロナかなあとなりますが、実は今年はマイコプラズマかもと思わないといけません。

マイコプラズマって聞いたことないと言う人が多いかもしれませんが、医者の中では超有名な病原体です。医師国家試験によく出るからです。以前はオリンピックの年に流行するのでオリンピック肺炎と言われていました。最近はその傾向が薄れていますが、今年はそう、パリオリンピックがありました。前回流行したのは２０１６年リオデジャネイロオリンピックの年です。割と当たっています。２０２０年は新型コロナで東京オリンピックが一年延期になったので、流行しなかったのかもしれません。とにかく、今年はマイコプラズマが流行しています。

マイコプラズマは潜伏期間が2～3週間ととても長いので、いつ感染したのかわかりにくく、家族内感染が多くなります。感染経路はコロナと同じで飛沫感染と接触感染なので、マスク、手洗い、手指消毒で予防しましょう。発病する人の80％が子どもですが、高齢者や成人も感染する可能性があるので油断はできません。症状の特徴は3～4週間続く長期の咳で、特に空咳が多いのが特徴です。

診断には迅速抗原キットが有用です。私が若いころ、最初に診たマイコプラズマ肺炎の患者さんは40歳代で元気に働いていた方でしたが、発熱と咳が続き、だんだん息が苦しくなってきたといって受診されました。レントゲンではそれほどはっきりした陰影はないのにもかかわらず、血中の酸素濃度は80％前半で酸素投与をしました。その頃、迅速キットはなかったので診断が難しく、通常の細菌に対する抗生物質を投与しましたが、熱が下がらないため、マイコプラズマに有効な抗生物質を使用したところ翌日には解熱傾向となり、血中酸素濃度も95％以上と順調に回復しました。

うがい・手洗い…基本的な感染予防を忘れずに

マイコプラズマは一般の細菌とは異なり細胞壁がないため、通常の抗生物質は効かないという特徴があります。今では細胞壁以外を標的とした抗生物質も多く作られているので、診断がつけば比較的治療は容易です。ただし、診断が遅れたり、高齢者や慢性肺疾患のある方、脳炎や心筋炎を合併すると重症化する可能性があります。

皆さんの多くはインフルエンザや新型コロナのワクチンをすでに打っておられ、万全の体制を取っておられると思いますが、今年はマイコプラズマにもご注意ください。基本はうがい、手洗い、手指消毒、マスクです。これらの対策を心がけて、健康に新年を迎えましょう。